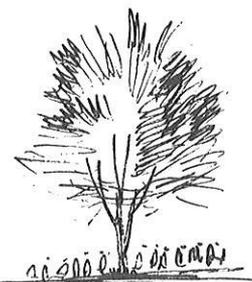


光の子

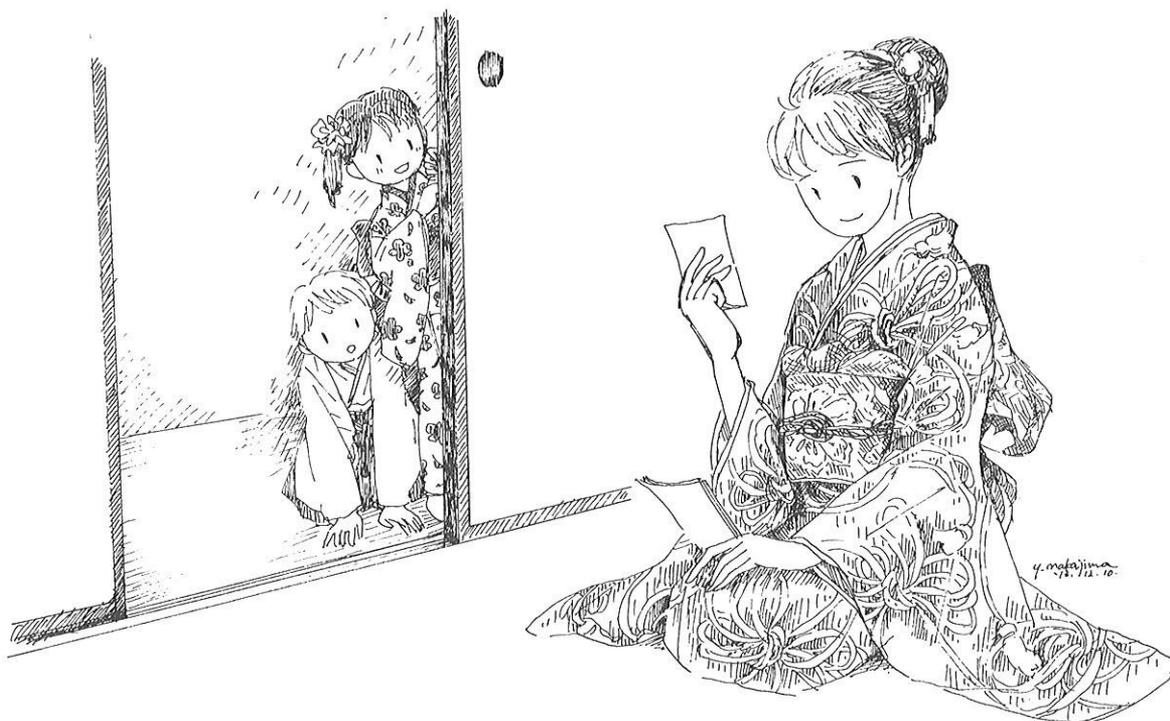


No.162 2014.1.1

●年間聖句 互いに重荷を担いなさい。(ガラテヤの信徒への手紙6章2節)

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。
本年もよろしくお願いいたします。

社会福祉法人 光の子どもの家



〔年賀状〕

表紙絵・中島由起子

〔細線〕

わつさりと来て日もさして時雨かな

雲去りて葉風残しぬ夕時雨

夕時雨縹を山の色とする

音立てて波の寒さは照りに照る

ふくろふは闇の中から目をひらく

引き上げて水の重さの竹瓮たけかめかな

冬うらら余白のときをおのづから

落合水尾

〔浮野〕主宰

新年を迎えて

竹花 信恵

明けましておめでとうございませう。昨年はたくさんのお支えとお励ましをいただき、ありがとうございます。今年はおかげさまで光の子どもの家も、創立30周年を迎えます。人が育っていく上で成人と認められる20年という期間では、まだまだ、という未熟さのみ感じられませんが、30年は、子どもから大人へ自立、成熟に向かう歳月であり、そろそろ大丈夫だよねと言われるでしょう。素晴らしい時間の積み重ねになります。

かわる職員もそれだけ年を重ねてまいりました。創立時から居続けている職員と、当時まだこの世に誕生していない職員という年齢差、そしてかつて「子ども」であった卒園生数名が職員として活躍してくれるようになり、これに備えなくてはならない日々に入っています。現状は課題が山積みですが、子どもたちと共に、目指す方向だけは日々確認しながら、この年も歩んでまいります。

どんな理由があるにしても子どもが親と離れて暮らさなくてはならないという事は、つらく悲しいことに違いありません。私たちの想像を超えたことでしょう。それなのに出会った子どもたちは明るく、たくましく生きています。

もし、自分が彼の、彼女の立場だったらどうだろうか。いつも考えさせられます。まっすぐに、とは言えませんが、でも神さまに導かれて曲がりくねっても立ち戻ることのできる位置に居続けることができるような家にしていきたいと心から願っております。

この月日の中でたくさんの卒園生が社会の中に出ていきました。がんばっている便りには大きな安心感を与えられ、励まされ、ただただうれいものですが、社会の荒波に巻き込まれて戻ってくる間に傷だらけになってしまったり、彼女らの存在に、初心に戻って取り組み直すこと、必要としている時に応じられる柔軟さをいつも準備しておかなくてはならないことに気づかされます。取り返しがつかないこととつかないことがあることが、せめて一人ではないことを示していく応援の継続ができる家であり続けたいと思います。

昨年、光の子どもの家で生活した時間より、社会の中で生きた時間のほうがずっと長くなり、若い職員より年長の卒園生が戻ってきました。幼いころの面影も見えない外見に戸惑う暇もなく、待たなしの状態からのここでの暮らしの再スタートとなりました。彼女ら、彼女らの実家になることはこの家

の養育の柱であり、他人に迷惑かける前に相談しようと思いつける関係でいたいと願っていたので、長年消息不明だっただけに連絡を受けた時にはひと安心でした。何かできる訳ではなく居場所の提供という事で同居が始まり、いつの間にか月日が流れていく中で、彼女自身の壮絶な過去の与えた影響は相当なものだったことを感じざるを得ませんでした。先の見えない不安は私の想像を遙かに超え、日常生活に支障が始め「健康」でないということだけが目立っていきました。今は医療の見守りの中で少しずつ元気を取り戻している最中です。私たちができる範囲がいかに少ないか思い知らされませんが、これからもこの家で、そして今度こそ誰のせいでもない、自分で選び取った人生を歩んでほしいと心から願います。

今も、そしてこれからも彼女の後輩たちであるこの家の子どもたちの暮らしは続きます。

先に見える話

老健施設みゆきの丘施設長 仙道 富士郎

2013年7月で満75歳になった。後期高齢者の仲間入りである。保険が後期高齢者の保険に変わったくらいで、特段の変化はない。前にも述べたが、老健施設の施設長をしており、月曜から金曜日まで、毎日8時20

分からの朝のミーティングの司会をする。それから一日が始まる。回って来た書類に捺印をする仕事、入所者の居室のある階のサービスセンターに出かけて行って入所者の健康状態について看護師からブリーフィングを受けること、そして種々の会議の司会を務めること。が主たる業務である。

空いた時間に、種々の情報を集めるために、毎日Gunosy(グノジー)日を通す。Gunosyというのは、登録しておく、個人の要望する分野のニュースを毎日電子メールで届けてくれるサービスで、新聞などには掲載されてい

ない、興味ある記事を配信してくれる、便利である。また、日経ビジネスの電子版も、経済関係だけでなく、種々の分野の出来事が載っている面白い。フェイスブックの自分のページにも毎日目を通す。75歳の爺さんにしては、結構IT情報まみれの毎日である。しかし、若い人々と根本的に違うのは、若い人たちは、得たIT情報を取捨選択して、自分に必要なものは、頭の頭に蓄積するが、私の場合は、IT情報にまみれても、それは私の頭を素通りして、蓄積されることはほとんどない。

しかし、ごくまれに私の関心事の中でも特にインパクトの強い記事は、自分の頭はダメだから、パソコンに記憶させる。だが、これとて安心はできない。パソコンのどこにそれをしまい込んだか、分からなくなり、探すのに往生するのである。

こんな効率の良いくない、いわば無駄な作業をどうして毎日続けているのか、自分にも分らないが、一人前ではないという意欲みたいなものは結構強く、若者などに任せておけるかと思うことも多いのである。こんなふうな想いに駆られること自体が老化の証拠ではあるのだが――。

いま振り返ってみると、私は、

自分の頭でモノを考え、自分の責任でことをなさなければならぬ年代に至ってからの方、遠い将来はおろか、近い将来、否直近のことに関しても、計画的に事をなしてきたということが無いように思える。

いまこの原稿を東京に向かう電車のなかで書いているが、JICAのシニアボランティアとして赴任したパラグアイの日系一世のインタビューをもとにした「聞き書き」の本を作るための打ち合わせが目的の上京である。「聞き書き」の本を作るといいたいような話も、じっくりと計画を立ててということではなくて、パラグアイ日系移住地で出会った一世の老人の話が私にとって余りにもインパクトが強く、こんな面白い話を残さない手はないと、話を聞いた時に突如として思い込み、皆に声をかけたことから始まったのである。

しかし待てよと最近思うようになった。かなり劣化はしてきたがこの文章をしたためる能力は、いまままだ残ってはいる。だが、長年の飲酒による脳萎縮の進行度合いから推定すると、肉体はいつまで長らえるかは不明だが、脳の働きの健康寿命はそんなに長くはないことを覚悟しなければならぬと思う。

だとするれば、思いついて突発的に事を始めるのはもう止めになければ、一緒にやろうと巻き込まれた人に仕事を残してしまうことになり、迷惑全極になってしまう。今やりかけている仕事も4つあるが、被災地の子ども支援のプロジェクトは私が始めたものではあるが、もう私の手を離れかけているので問題はない。あとの三つは本をまとめる仕事である。一つは話に出てきた「聞き書き」の本、二つ目は「70歳からのボランティア活動―JICAシニアボランティアから被災地の子ども支援へ(仮題)」、最後は今原稿を書いている「光の子」の連載エッセイのまとめである。

いずれも途中までは来ているが、完成させるにはまだ時間が掛かりそうである。まずは死なないうようにしなければならぬ。脳の働きの健康寿命も保たなければならぬ。いずれにしても、結論は深酒を慎むということか。

紙数が尽きた。世の中には「先に見える話」は多いのだが、「先に見える話」もあるのである。

「先に見える話」もあるのである。



「共育ちカンガルー日記」

(27) 赤いランドセル

近藤みちる

どこの家庭でも子供が年長さんになると、あちこちから毎日のようにランドセルの広告が届くようになるものだ。我が家の郵便受けにも、去年の春ごろから毎日ダイレクトメールが届くようになった。おかげで優希はすっかりランドセルに夢中になり、一年生になってランドセルを背負って小学校へ通うことを、心待ちにするようになった。

ちょうどこのころ、優希の就学相談が始められた。まず教育委員会の担当者で心理士の先生による面談があり、その後優希の幼稚園での様子を見ていただき、7月には先生方の案内で、優希と一緒に小学校の見学に行った。

優希はこのとき、初めて小学校の門をくぐった。憧れのランドセルを背負ったお兄さんやお姉さんたちに憧れの眼差しを向け、広々としたグラウンドや大きな校舎に瞳を輝かせた。先生方の案内で一年生の教室や音楽室、体育館などをひと通り見て回り、最後に特別支援学級(支援級)へと導かれた。

支援級は、情緒障害級と知的障害級に分かれていて、私たちが案内された情緒障害級には、自閉症と思われる子どもたちが3名在籍していた。小ぶりの教室で、それぞれの机が壁に向かって置かれ、余計な刺激を受けないように、机の両側がパーテーションで仕切られていた。教室の真ん中には、集団活動を行うときのための大きな机が置いてあった。

実はこの時点で私たちは、優希の進路について、特別支援学級が妥当ではとの打診を受けていた。幼稚園と学校は全く違う世界で、園では支援員が付かなくても何とかクラス活動について行っているが、学校では難しいだろうということだった。確かに、学校の一番の目的は学業であり、普通級の授業に優希がついて行くのは困難だろう。それでなくとも集団が大きくなり、学校で過ごす時間も長い。環境のすべてが、それまでとはがらりと変わるわけで、これは自閉症の優希にとって、大きな負担となるに違いない。優希が安心して学校生活を送るためには、優希の

特性に応じた特別なサポートが必要であることは、誰の目から見ても明らかだった。教育委員会の見解に、優希をよく知る療育の先生方も概ね賛同していた。この日の学校見学は、優希に支援級を見せることが主な目的だったのである。

ところが優希は、支援級には何の興味も示さず、普通級の教室ばかり覗きに行きたがっていた。無理もない。優希がテレビや広告で目にしてきた小学校の風景は、大きな黒板に向かつてたくさん机が並んでいる、ちびまる子ちゃんに出てくるような教室なのだから。優希はおそらく、まるちゃんのように黄色い帽子と赤いランドセルで、たくさんのお友達と一緒に、同じ教室で一年生を迎えるつもりになっているのだろう。そんな優希の気持ちを見ると、支援級という提案をすんなりと受け入れる気にはなれなかった。

「どちらになさるかは、ご両親のお気持ち次第です。お返事は急ぎません。」こうして進路の決断は、親である私たちに託されたのだった。

見学を終えると、私たちはしばらく校庭の片隅で優希を遊ばせた。「しがつ(4月)になったら、いちねんせい！」優希は嬉しそうに何度も叫んで、無邪気に校庭を走り回っていた。思えばこの6年間、私たちは幾度となくこうした岐路に立ち、歩むべき道を選んできた。初めて療育センターの門を叩いたとき。確定診断を

受ける決心をしたとき。幼稚園を諦め療育施設A園への入園を決めた時。そしてA園から幼稚園への転園に踏み切った時。正解なんてどこにもなくて、いつだって手探りで答えを出してきた。「優希の笑顔が消えないこと」それだけが唯一の指標だった。選んだあとは、親子でしっかりと手を繋ぎ、何があっても逃げずに、諦めずに、ひたすら3人で歩み続けて来た、そんな日々だった。

そのとき私たちは気づいた。大切なのは、どの道を選ぶかということではなく、選んだ後にどうやって歩き続けるかということなんだと。転んだり、立ち上がったたり。走ったり、座り込んだり。どんなときも家族が手と手を離さずに、この優希の輝く笑顔が失われないように支えること。それが優希と共に生きるということなんだと。迷いは消えた。そして私達は、優希を支援級に進ませる決心をした。

12月。夏休みに注文したランドセルが、ようやく我が家に届いた。優希が選んだ真つ赤なランドセルは、優希にとってもよく似合っていた。真新しい革のいい匂いがした。

「しがつになったら、いちねんせい！」その笑顔は眩しいくらいにきらきらと輝いていた。

水たまりについて跳んで一年生
みちる

とうとう七十七歳になってしまった。いつの間にか。そう、いつの間にか生後七十七年ということである。

私の父は、いつも元気であったのだが、72歳で鬼籍に入ってしまったものだ。その父を5年も追いついてしまっ

たことになる。しかし、この年齢になって、つくづく思うことがある。

寿

中島 陸雄

喜

それは、自然が以前に比べて、一層美しく見えるようになってきたことである。また、絵や彫刻作品が、一層深い心を表現しているように見えてきたし、音楽なども同じで、例えば歌曲や歌謡曲などの歌の言葉が、深く心に響いてくるような気がする。

ある。同じ歌でも、若い頃聴いたヒット曲なども、単に歌詞やメロディを覚えていたに過ぎなかったような気がするのだが。それが近頃、昔のいわゆる懐メロを聴くと、やけに心に響くので

ある。喜びも悲しみも、詩人というものは、よくも深い心を表現するものだなあと感心してしまう。作曲家にしても、何も無い所から、あんな美しいメロディを掘り出してくるものなのだなあと、思い知らされる。

七十七歳にして人生の深さがわかってきた？いや、そんなものではないらしい。世の中の複雑な事象に真正面から対峙するのが、面倒になってきただけなのかも知れない。

したがって、人生にうしろ向きになってきたとも言えるのかも知れない。つまり、神様が遥か彼方から「あいつをそろそろこちらに呼んでやろうか」とお考えになり始められたのかと、少々不安にもなってくる。

とは言え、現在何とか健康で、一粒の薬も飲まずに暮らしている事に関しては、全くありがたい事であって、神仏に感謝している次第である。

いづれにしても、七十七に寿の字を付けて、目出度い事とした先人たちの思慮の深さを思わざるを得ない。

そこで、今年になってから何回か、喜寿を祝う食事会などをしてもらった。私の誕生日を過ぎた或る日、私

が最初に勤めた学校での教え子たちが、喜寿のお祝いだといって、食事会をやってくれた。7、8人くらいのメンバーである。それにしても、私の誕生日などを、よく覚えていてくれたものと思う。

私は、感謝の気持ちを込めて、その頃咲いていたムクゲの花を水彩で描いて、来てくれた昔の生徒たちにプレゼントした。

こんな時「寸志」として金一封を持って行けば簡単なのだが、小さいながら絵を額装して渡した。

「この絵はねえ、私が死んだ後でグッと値が上がるから、大事にしておけよねえ。鑑定団に出すと、ゼロがいくつも付いて高値に評価されるからね。」

受け取る方でも冗談と知っているから「うん、高く売れたら、家族で世界一周の旅行をするかな。」と言うのがいた。「いや、売っちゃあだめだよ。値打ちの高い低いじゃなくて、先生にももらったんだという謂れがあるべえ。大事にとっておくべきじゃあねえか。」などと、調子の良いことを言うのもいた。

いづれにしても、この絵は捨てられてしまっても仕方がないし、大事にしてくれるのも、あちらの考え次第である。私も、木彫りの小さいパイプを

一つ持っている。これは、学生時代の同級生で、現在は工芸部門で国指定重要無形文化財保持者、つまり人間国宝になっている友達の手である。恐らく、もし売るとすれば高い値がつくものであろうが、高くても安くても、そんな事には関係なく、彼の作ったものであるということで大切にしている訳である。

そこで、私の描いた小さな花の絵であるが、高い安いでなく、昔の生徒たちには、持っているだけでいいものと思っている。

喜寿のお祝い食事会の後、家へ帰ってみると、久しぶりに息子が来ていた。

「今日はねえ、食事会のお礼に、絵を一枚ずつプレゼントしてきたんだ。そこで、この絵はおれが死んだ後で、グッと高値になるから大事にとっておけよと言ってきた。」

と言うと、息子は、「鑑定団に出すと、鑑定士がよく調べて、これはニセモノではありませぬ。まさに作者本人が描いたホンモノです。だから、値段は安いです」と言うんじゃない？」と言って笑った。

「そうか、それは正しいかも知れないな。」



謹んで新春のお祝いを申し上げます。皆様方よりの熱き祈りとお支えにより、幼児4名・小学生15名・中学生9名・高校生8名・自立支援中の卒園生4名(内2名大学在学中)、そして職員23名と共に29回目の新年をここで迎えることができます幸いを、心より感謝いたします。

4月には消費税率が8%に上がり、その増収見込額(試算)は約五兆一億円で、その大半は社会保障の安定化に充てられる予定となっています。気になるのは、社会保障の充実に使われる内の約五千億円が子育て支援や社会的養護の充実に充てられるとの報道がなされておりますが、もし「子育て支援」として国より地域自治体へ一括交付金として支払われた場合、社会的養護分野の児童福祉施設の充実に必要な補助金が、各地方自治体からきちんと配分されるのか、ということです。そしてこの事が地域間格差に繋がらないように願っております。

今後ともお支えとご指導をよろしくお願い申し上げます。新しい年も皆様方のご活躍とご健康をお祈り申し上げます。

施設長 田中 郁夫

新年明けましておめでとうございます。昨年も皆さまにお支えいただき、子どもたちと楽しい暮らしをつくるこ

です。日本代表チームは好成績を目指してチーム一丸となって戦ってくれるでしょう。私もこの一年を素晴らしいものにするために、個の力を高め、それを組織の中で活かせるような働きを目指したいと思っております。本年も光の子どもたちの家をよろしく願いたします。

新吉屋 健太

新年明けましておめでとうございます。いつも光の子どもたちに心を寄せてくださいありがとうございます。

私事ですが、今年で光の子どもの家に来てから10回目のお正月！幼稚園生だった子どもが、今は思春期真っ最中の中学生！昔は可愛かったのになあと思う今日この頃・・・おっさんになったなあ(こんなこと言ったら30年近く続けている職員に怒られてしまうでしょう)。

今年もまた健康に気を付けて子どもたちと共に成長していけたらと願っています。今後ともよろしく願いたします。

田中 要一

昨年は格別の御厚情を賜り、厚く御礼を申し上げます。

本年も職員一同、子どものために働くことを心がける所存でございますので、何とぞ昨年同様のご声援を賜りますよう、お願い申し上げます。

とができました。今年も皆が健康で元気でいられたらと思います。よろしく願いたします。

池田 祐子

明けましておめでとうございます。

お正月と言えばおせち料理。毎年、おせちの一品を各家で担当しているのですが、ここ数年、私は「松前漬け」を担当しています。年越しの準備で忙しい年末、するめと昆布を買い、時間をみつけてはキッチンばさみでチョコキチョコキ。テーブルの上にタッパーに入れたするめと昆布を置いておくと、子どもたちも「あつ！やりたい！」とテレビを見ながら、おしゃべりをしながらチョコキチョコキしてくれます。多少不揃いでもお構いなし。そうして出来上がったおせちを囲んで、新たな一年のスタートです。今年もよろしく願いたします！

牧野 由紀子

新年あけましておめでとうございます。おかげさまで無事新年を迎えることが出来ました。皆様の温かいご支援に心から感謝申し上げます。

毎年大晦日から正月にかけて沢山みかんを食べますが、今年は買ってきたみかんとともに仙道家の前になったみかんも皆で食べました。一つ一つ味が違って、子どもたちの反応も面白かつ

皆様の健勝を心よりお祈り致します。本年もどうぞ宜しくお願い申し上げます。

福島 文明

明けましておめでとうございます。

また今年も子どもたちのたたくさんの表現を受け取りながら、一歩一歩前進していけるような一年にしていけるよう頑張りたいと思っております。どうぞ見守っていただけますよう、よろしく願いたします。

積 みどり

明けましておめでとうございます。古希になりました。これからも一日大切に行きます。今年もよろしく願いたします。皆様の健康もお祈りしています。

五木田 供三

明けましておめでとうございます。

昨年も大変お世話になりました。遅くに帰ってきた子どもも「おかえり、お腹すいたでしょ」と迎えて、温かいごはんを用意して楽しいおしゃべりをする。毎日の何気ない心遣いが、やがてここから自立していく子どもたちの心に、しっかりと積み重なっていつ

たです。今年も仙道家のみかんのよう、それぞれに味のある子どもたちと健康に過ごせればと思います。今年もよろしく願いたします。

田口 貴子

明けましておめでとうございます。昨年は皆様からのあたたかいご支援をたくさんいただき、ありがとうございます。

光の子どもたちの家の職員になって3回目のお正月を迎えることができました。今よりもっと子どもたちに寄り添えるように頑張ります。本年もどうぞよろしく願いたします。

細瀬 野宜江

明けましておめでとうございます。今年も皆様のお祈りとお支えのおかげで、子どもたちと共に新しい年を迎えることができました。子どもたちと共に心が豊かになるような暮らしを目指してまいります。この年が皆様にとって祝福に満たされた年となりますようにお祈りします。

穴水 祐介

新年明けましておめでとうございます。昨年色々なことがありましたが、なんとか2014年を迎えることができました。今年もサッカーワールドカップの年

ほしいと願っています。

一日三度のごはんを大切に、今年もお腹いっぱい、笑顔いっぱいの子どもたちと共に過ごしたいと思っております。どうぞよろしく願いたします。

平川 光子

明けましておめでとうございます。旧年中は大変お世話になりました。今年30周年という節目を迎えますが、続けてこられたのは皆様を支えてくれたおかげと思ひ、感謝しております。私はまだ日が浅いのですが、お支えくださる皆様のあたたかさを実感しております。

本年が皆様にとって健康で喜びに満ち溢れた年になりますようにお祈り申し上げます。今年もどうぞよろしく願いたします。

梅田 由味子

明けましておめでとうございます。今年のお正月は光の子どもの家で迎える1回目のお正月です。おせち料理から心を込めて、新しい年も子どもたちの笑顔を大切に頑張ります。

皆様の御多幸をお祈りいたします。今年もよろしく願いたします。

佐俣 浩代

プルームズ

子どもたちの季節 仙道家

田畑に霜が降り、冬本番を迎えた今日この頃、いかがお過ごしでしょうか。クリスマスを待ち望む12月ですが、落ち着いた気持ちでゆったりと・・・ということとは難しく、子どもたちは冬休み前の行事や課題に追われています。

11月末に小学校で持久走大会がありました。その3日前から緊張していたのは駆斗です。それから軽口を叩いてはいるものの、目が笑っていない利久。「利久だけには負けない！」と宣戦布告する則也。この高学年男子3人のライバル関係は、周りにも良い影響を与え、当日はみんな大活躍でした。それでも納得のいっていないような表情をつくったり、「本当はもう1つ上(の順位)に行けたから」と虚勢を張る姿には、思わず笑ってしまいました。「今、それは無理だろう」と思ったでしょ！」とすぐに怒られました。

さて、今年の仙道家の担当である第4アドベントでは、子どもたちのどんな姿が見られるのかとても楽しみです。去年の朗読劇が大変良い出来だったので、つい期待し過ぎてしまいましたが、謙虚に(愛)心を込めて準備していきたいと思えます。子どもたちにも、いつも支援していただいている皆様にも、あたたかなクリスマス、そして新年が訪れますように。



和田 優右子

光の中で

佐藤家

明けましておめでとうございませう。昨年は大変お世話になりました。今年もどうぞよろしくお願ひします。

私も今年で7年目になろうとし



岩瀬 志穂

ています。時の経つのは本当に早いものです。今の中高生は、私が働き出した時には私より背が低かったのに、今では見上げるほど。私は職員の中でも一番背が低いので、子どもたちにまず目標にされます。「やったあ！岩瀬さん抜かした！」と次々と。でも言われるたびに嬉しくなったり切なくなったり、子どもたちの成長を喜んで

原田家日記

明けましておめでとうございませう。今年もよろしくお願ひします。

小学生の智司のマイブームは怖い話のDVDです。同室で智司のことが大好きな雅樹は幼児ながら「学校の怪談」「花子さん」「ゲゲゲの鬼太郎」「怪談レストラン」をドキドキしながら観ています。2人ともあまりにも怖くなつてくると、担当者の両腕にしがみつきはじめるのがなんともかわいらしく、私も一緒になって楽しんで

おぼけが好きすぎて、朝食でも夕食でも、入浴中でもいつでも突然おぼけの話になります。自分たちを妖怪に例えると、やせっぽちの雅樹はカップパのようで、まるっこい智司はこなきジジイ。私は雪女で同じ家の保育士の池田さんはろくろ首だとケラケラ笑っています。笑っているうちはいいのですが、自分で話しながら怖くなってしまう智司は、暗い所に一人で行けません。私がいっしょに行けるわけではないので、冗談で「雅

樹、ついていってあげて」と言うのと「いいよ！」とついていってくれるようになり、今では2人なら暗い所も平気になりました。

工藤 久恵



季節のおとずれ 竹花家

明けましておめでとうございませう。今年もよろしくお願ひします。この一年を振り返り、3名の卒園生たちのそれぞれの成長を報告させていただきます。

高校の途中で家族と再出発をすることになった周作、これまでの時間を取り戻すかのように重ねる家族との生活の中で、理想と現実との折り合いをつけながら何とか軟着陸できるところにまで至ったのではと感じています。まだまだこれからです。

これまた高校の途中で親もとへ戻ることになった太志、高校を無事卒業し介護福祉の仕事へ就いたという願ひをかなえるべく専門学校へ入学しました。奨学金を得て、アルバイトをしながら学費を工面し、親もとで暮らしながらも多くを頼ることなく頑張っています。親元からの自立もそう遠くはないでしょう。

小西 剛史



河のほとりでは、お正月で一番の楽しみは、たくさん卒園生が元気な姿を見せてくれることです。ここ数年はご主人や奥さん、子どもを連れてやって来る卒園生が増え、光の子どものお正月は、とても賑やかに

倉澤家

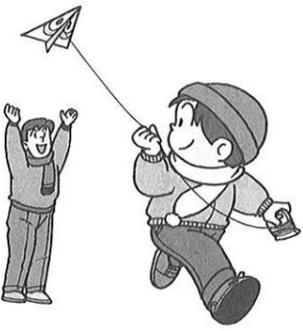
明けましておめでとうございませう。旧年中は大変お世話になりました。本年もよろしくお願ひいたします。

お正月で一番の楽しみは、たくさん卒園生が元気な姿を見せてくれることです。ここ数年はご主人や奥さん、子どもを連れてやって来る卒園生が増え、光の子どものお正月は、とても賑やかに

在園中は神経を尖らせ、全身で職員を拒否していたような子どもが、立派に成人し、別人のような穏やかな笑顔で現れたり、ママになった卒園生がそっくりな子どもを連れて来たり・・・。長くここに居て良かったと思える瞬間です。そして、もうひとつこの時期になると思いだすのは、安田貴志のこと。彼が亡くなってもうすぐ2年。時の流れの速さを感じます。もし彼が生きていたらお正月の席で満面の笑みを浮かべ、その場を盛り上げてくれたことでしょう。もしかしたら彼の隣には、かわいい奥さんや彼にそっくりな子どもがいたのかもしれない。今年も倉澤家のダイニングで、

あの時のままの貴志がみんなを見守ってくれています。今年だけに今年は何もかもうまくいきますように・・・と祈りながら。

倉澤 智子



養育論の試み その15

菅原 哲男

隣る人11 はたらき

明けましておめでとうございます。この年が皆様にとって祝福に満ちたものになりますよう祈り上げます。また、本年も倍旧のご支援を心からお願い致します。

昨年末、「隣る人」の上映と講演に、秋田県東成瀬村に招かれた。東成瀬村は、小・中学校の全国学力テストで首位を保っている秋田県を先導している。聞けば国内外から訪れる人や団体が絶えないという。

幼い頃は最下位に甘んじていた秋田県の教育状況しか知らない私は、スズ根漫画のような厳しい教育をしているのかと、思い続けていた。

しかし、一度目の当たりにした東成瀬村の子どもの状況は、そんな愚かさを吹き飛ばしてくれた。

同道した「隣る人」企画の稲塚氏が、図書室を見てくださいと、案内を請い、そのまま行方不明になりそうになり、帰りの時間を遅くしたほど、子どもたちにとって考え抜かれた魅力的なものだったのである。なんと村に一つの小中学校の図書室には司書がいたのである。図書室

の図書は毎月入れ替える。展示収納にも絶えず工夫がされていた。読み聞かせも随時ある。本に触れる機会を大切にしていることが伝わってきた、と稲塚氏は言う。

村の鶴飼孝教育長は、昨年、インタビューで「村が一体となって子どもを育てている、子どもは村全体に愛されているという雰囲気が大切である。そうして初めて小規模校の特性を生かした「小中連携教育」が可能になる。生まれた時からこの村の子どもである。指導内容、指導方法、9年間を通じてすべて一貫性を持った教育を行うようにしている。(共同通信2012年)」と述べている。

どこに行っても生きていけるようその子の力を引き出し、常識を身につけることを目標にしているだけで、当たり前なことと成瀬小学校校長は淡々と述べたのである。

翻って、光の子どもの家も「子どものための子どもの施設運営」というごく当たり前な理念を目標に走り続け、30周年を目前にしている。教育長や校長の言葉を重ねると、子どもたちは光の子どもの家全体か

現場から

続・光の子らしく

岩崎まり子

明けましておめでとうございます。旧年中は大変お世話になりました。今年もよろしくお願いします。

光の子どもの家での大きなテーマの一つである真実告知は、私が初めて担当した萌季が最初でした。真実告知という言葉すらない頃でした。「私は何でここにいるの？(私の家から、両親から引き離されて……)」

一度口に出してからは、私と二人だけの時を見計らって頻りに尋ねてきました。最初は、ここでの



生活や私への不満が根本にあるのだろうと思ひ、とても悲しい思いになったのを覚えています。けれども、彼女の疑問やその疑問を必死に解きたいと欲する、その心の動きは真つ当で当然だと納得もできました。

私たちは、その彼女に誠実に応えなければならぬと考えたのです。その子どもに誠実に向き合い、誠実に寄り添いたいという願いが真実告知をする出発点でした。それから二十年以上が経ち、真実告知の方法もバリエーション豊かになりました。ただ、変わらないことは、重た

ら愛されているという雰囲気大切にしているかと思ひ続けてきた。そうして初めて小規模施設の特性を生かした責任担当が生きてくることになる。そうなるか、年の初めに確認したい。

養育内容、養育方法など全てが一貫した養育を行っているだろうか。昨年は、施設内研修に力を入れた芹沢俊介氏の力を借りて研修を重ねてきたのである。その内容は、根底から思想性に依拠しながら、具体的な子どもへの関わりについて述べられたものである。

戦後思想界をリードし続けてきた吉本隆明の高弟として、それを更に深化させ養育について語り続ける芹沢氏の10回に亘る連続講演を、耳学問として落ちこぼしてはならないと思う。知っていることとやっていることの間には大きな間隙があることが多いのだから。

大声での叱責よりは優しくほめること。ここに来るまでほめられるよりは叱責され、ほとんど九死に一生を得てきた子どもたちである。居ることを認知され、そして評価されることを願うように求めている。

洋の東西を問わず勲章という代物がある。重さにまっすぐに立てないだろうと思うほどの勲章をつけた軍人などをニュースで見る。それほど人は評価を求めているのだ。まして

い事実を伝えられたその子どもが壊れないように支えなければならぬという、私たちの責任の重さだろうと思ひます。

子どもの方も、自分が壊れないように頑張るのでしよう。それが時には「忘れる」ということだったり、事実を捻じ曲げるといふことだったりすることもあつたでしょう。

先日、歩美ちゃんの真実告知について相談しているときに、ライフストーリーブックを用いる方法について提案されました。振り返りたいと思つたときにいつでも読み返せる「事実を誤りなく確認できる」という「長所」をあげて……

さまざまな議論をして、今回、そのライフストーリーブックの利用は見送られました。時間が経つ程に私の中で疑問が膨らんでいきます。「自分の都合の良いことだけ覚えていく」「自分に都合の良い解釈をする」——それは認めてはいけないことなのでしょう。いつか丘実と話していたときに、たつた一回きりだった母宅への帰省で、散々な思いをした、そのことを「覚えていない」ことが表現

この子どもたちの境涯は評価はあるか認知さえされたことがないかあっても極小なのだ。子ども期のそれは悲惨でさえある。だから認知と評価が子どもへの関わりの基本でなければならぬ。

大きくなった子どもたちが帰ってきてわいわい話をするのがよくある。そんな中で、先頃、30代半ばの者が、長い休暇に帰省して帰ってきたとき、布団がなかったという。担当者が出たので「布団がない」と言ったら、どこかで見つけてきなさいと眠そうな声で言われたという。そんな話が出るたびに身の縮む様な思いと、申し訳なきがけない交ぜになる。申し分のないはたらき人には、きつと覚えていないような些細なことだが、子どもにとっては死にたくなるような過ちをしでかしてしまう我々である。

今年こそ、言うこと、思うこと、願っていることが、痛みを引き受けながら具体化できるような職員集団でありたい。当たり前の養育を当たり前にするために労苦をいとわず、自分の暮らしを少しズラして、子どもを受け止めることが出来るように願うことである。



されました。そして、つい先日も「お母さんに会いたい」と言っていました。

私は、あんなひどい思いをしたのだから忘れられないだろう。と思つていたのですが、そうではなかったのです。当時の彼女にとって、また、それ以後の彼女にとつて、あの時のことは事実であつてほしくないことで、記憶から取り去ってしまいたいくらいショックなことだったので、今更ながら気付かされました。

忘れることも「忘れた」と言うことも、記憶をねつ造することも「当然だよ」と本当に思うのです。私にライフストーリーブックがあつたとしたらどうだろう……

たくさんの選択肢がある中で何をどう理由で選び、また選ばないのか。流れるように過ぎていってしまふ日常の中で、しっかりと悩み、迷い、選択していけるようにしたいです。



新年明けましておめでとうございます。

去年は大変お世話になりました。

今年も基準外職員確保のための

バザーを行います。

品物のご協力をお願いします。

—光の子どもの家バザー実行委員会—



日誌抄 = 子どもと創る暮らしの風景 = 2013年9月~10月

2013年9月現在

幼児4名 小学生15名 中学生9名 高校生8名 36名

5日 渡部かずき記念礼拝 すっかり大人になった元クラスメイトが今年も集まって下さった 感謝

13日 芹沢俊介氏による施設内研修
山ノ下牧師による夕礼拝 感謝

20日 木田浩靖牧師による夕礼拝 感謝

21日 聖学院大学学生によるワーク

27日 若月健吾牧師による職員礼拝 感謝
中学校との連絡会 多感な時期を迎えている子どもたちに向き合うために中学校との細かな連携をお願いしている 感謝

10月

4日 杉本英夫様による夕礼拝 感謝

5日 浦和ダイヤモンドロータリークラブの皆様14名来訪し家電製品などをいただく 心より感謝

7日 幼稚園運動会 小さい子どもたちの目一杯の頑張り

に拍手喝采

10日 赤十字奉仕団の皆様による除草作業 光の子どもの家後援会の皆様によるそば会 長年にわたるお支えに心より感謝

19日 聖学院大学学生によるワーク

23日 芹沢俊介氏による施設内研修

25日 光の子どもの家初代理事長福島勲記念礼拝

<9・10月の物品寄贈者各位>

高森夢佳 大橋清栄 中村久美子 中村和彦 杉山和俊 根本勝美 宿谷幸代 加部芳子 松本明子 小山田貴子 木村郁子 片山和恵 大村眞理 大塚東一 池端寛 日本聖書協会 日本スポーツ用品協同組合連合会 千代田教会バザー委員会 財団法人日本真綿協会 ビームス古河店 セカンドハーベストジャパン ほか多数

☆今年も豊かな出会いの中で子どもたちが成長できたことを感じ、心より感謝しております (洋)

/// // 反 射 光 // //

☆明けましておめでとうございます。昨年中も格別のご指導、ご支援をいただきありがとうございます。本年もよろしくお願い致します☆重大な岐路に立たされているこの国の行く末を案じながら、政治の動向を追う方も少なくない時代です。大きな流れと決して無関係ではない、むしろ地続きに現代の子どもたちの生活、将来が存在します☆日本の子ども人口は約一六四九万人、その中で児童養護施設で暮らす子どもたちは約三万人、全体の〇・二%にも満たない数字です。児童養護施設で暮らす子どもたちは政策の中であまりにもないがしろにされてきたと言わざるを得ない現状があります。それはこの国の子ども、子育て家庭への支援がいかに後進的かという証拠でもあります。加えて虐待通報件数は今年年間七万件に上る勢いで、留まるところを知りません。光の子どもの家も例外なく常に定員目一杯です☆必要なのは経済だけではなく子どもを大切にするための施策です。子どもに関係するすべての領域で今必要なことを今始める、そんな気運の生まれる年になったらと切に祈り、新たな歩みを進めます。

(洋)